

こうした傷寒論觀が艮山によって強く主張されたわけではないことがわかる。

しかし椿庵の孫後藤栗庵の『傷寒瑣言』にみえる「三陰三陽」や修庵の「虚実」をふくめて、後藤流の傷寒論觀は『傷寒論』を『素問』から切り離して「傷寒論には傷寒論の世界觀がある」とする古方派の傷寒論觀形成と腹診術の發達に重要な役割を演じていると思われる。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究室)

崔知悌『骨蒸病灸法』の伝承について

——崔氏四花灸法の由来——

石原 武

現在の鍼灸医学書に載せられ、実際の治療に応用されることもある四花灸法は、一般に崔氏の法といわれているが、その出典については必ずしも明らかではない。そこで今回その出自と伝見について調査を行ない、若干の知見を得たので報告する。

『旧唐書』経籍志、『唐書』芸文志には当時存在した医書が多数載せられているが、このうち崔知悌『骨蒸病灸法』一卷の名が見えている。また『宋史』芸文志や『通志』芸文略にも『崔知悌灸法』一卷とある。いずれも現存しないので断定はできないが、おそらくこれらは同一の内容をもつ書と推察される(以下『崔氏灸法』と略称する)。このことから、同書は宋まで伝わったことが窺える。

崔知悌は『崔氏纂要方』十卷の撰者として知られる人物で、『旧唐書』ならびに『唐書』の崔知温伝に記載がある。これによると高宗（在位六五〇—六八三）頃の人で、中書侍郎の職にあり、夷敵の討伐に功あって戸部尚書に至ったという。

現伝の資料中、この『崔氏灸法』を引用する最も早い書は『外台秘要方』（七五二成、いま静嘉堂文庫蔵南宋紹興頭版による）である。その卷十三には「灸骨蒸法図四首」の項があり、「崔氏別録灸骨蒸方図并序、中書侍郎崔知悌撰」と注されている。内容はおよそ七八八字にわたるもので（後述の②③に相当、現行本中には図はない）。

宋代まで『崔氏灸法』の伝わったことは先に述べたが、宋代に編纂された書でこの『崔氏灸法』を引くのは、『蘇沈良方』と『新大成医方』である。

『新大成医方』はこれまで斯界で知られていない書であるが、王元福の初版本（二二六七刊）が台湾国立中央図書館に現存している。同書の巻四中の「崔氏灸法」の部には、①某氏序、②「唐中書侍郎崔知悌序」、③「取穴法」、④図十一種、⑤骨蒸二十二種、⑥「用尺寸取穴法」、⑦「艾炷大小

法」、⑧「取艾法」、⑨「用火法」の九項にわたる記載がある。①には「崔承相灸勞法、外台秘要、崔相家伝方、及王宝臣経験方、悉編載、然皆差誤、毘陵部有石刻最詳、予取諸本、參校成此一書……」とあるところから、毘陵の石刻を中心資料として他本を交え、この『崔氏灸法』を校訂したことが知れる。

『蘇沈良方』は蘇軾・沈括の著にかかり、一〇七五年に成立した書とされ、この点『新大成医方』よりはるかに古い。現存する最古の版本は明刊本（刊年不明、宮内庁書陵部蔵）であるが、ここに引用された『崔氏灸法』は前述の①②③のうち④を欠くだけで、他は細かい点を除きほぼ同文である。しかし『蘇沈良方』の成立・伝承に関しては疑問が多く、『崔氏灸法』に関しても伝本過程で④を欠いた可能性も考えられ、①の某氏序が誰の手に成るかの問題も含めて、『新大成医方』引用文との相互関係を今のところ明らかにすることはできない。

次いで元代に成ったとされる『十葉神書』には、①を除き、④の図を含むすべての部分が「孫子中家伝崔氏四花穴法」と称して引用されている。『十葉新書』の伝承につい

ても不明確な点があり、この部分は原『十薬神書』にあつたものではなく、それを校刊した寧の猷王が補入したものである。

ともあれ『新大成医方』『蘇沈良方』の記載とよく一致し、『崔氏灸法』の旧態を比較的よく保存しているといえるであらう。

このほか、一二二〇年に成つた『鍼灸資生経』にも「灸二十種骨蒸」の項を挙げ『崔氏灸法』からの引用があるが、記述は粗略で、前述の諸本とは相当の異差がある。明代以降、劉瑾『神应经』（一四二五）、高武『鍼灸聚英』（一五二九）、楊继洲『鍼灸大成』（一六〇二）、張介賓『類经图翼』（一六二四）などの鍼灸関係書にこの『崔氏灸法』が引用されているが、これらはいずれも大幅に節略あるいは歪曲され、ないしは別法が加えられ、『崔氏灸法』の旧態から甚だかけ離れたものとなつてしまつてゐる。

今日一般に知られる「崔氏の四花穴」はこれら明代の鍼灸書を継承したもので、決して原法を伝えるものではない。先述のごとく曲りなりにも唐代の『崔氏灸法』は宋元の医書中に伝存するのである。『崔氏灸法』を文献学的な

観点から正確に把握するには、『十薬神書以前の諸文献に溯つて検討することが必要である。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究室）